



## 日本音楽教育学会ニュースレター

## 目次

<b>1 学会からのお知らせ</b>	
1-1 日本音楽教育学会第 46 回大会(宮崎大会)のご案内	2
1-2 第 13 回音楽教育ゼミナールのご案内	4
1-3 学会の動向	5
<b>2 委員会からのお知らせ</b>	
2-1 選挙管理委員会	5
2-2 編集委員会	5
2-3 学会誌のあり方に関する検討委員会	6
<b>3 音楽教育の窓</b>	
3-1 〈連載〉音楽・教育・学校(4) デミングに学ぶ音楽科の経営指針——競争原理から共有原理へ——	7
3-2 今年度の学会・研究会等の開催予定	8
3-3 平成 27 年度 全日本音楽教育研究会全国大会 静岡大会のご案内	9
3-4 ISME 情報	9
<b>4 会員の声</b>	
4-1 子ども達の一番近くにいる研究者でありたい	10
4-2 研究構想を練る——中国地区 4 大学合同ゼミに参加して——	11
<b>5 新刊紹介</b>	
5-1 『長唄の世界へようこそ』	12
5-2 『戦時下の子ども・音楽・学校——国民学校の音楽教育——』	13
5-3 『哲学音楽論』	14
<b>6 報告</b>	
6-1 平成 27 年度第 1 回常任理事会	14
6-2 平成 27 年度第 1 回理事会	16
6-3 平成 27 年度第 1 回編集委員会	19
6-4 平成 27 年度学会賞審査委員会	19
<b>7 事務局より</b>	20
編集後記	

# 1 学会からのお知らせ

## 1-1 日本音楽教育学会第 46 回大会(宮崎大会)のご案内

### 1-1-1 第46回大会について

第46回大会実行委員会委員長 菅 裕

前号でもお伝えしました通り、日本音楽教育学会第 46 回大会が、下記の通り、今秋 10 月 3 日(土)及び 10 月 4 日(日)に宮崎市で開催されます。大会主題を、「新たな異文化との出会い：16 世紀から 21 世紀へと」といたしました。

大会初日には、宮崎大学名誉教授の竹井成美氏から「新たな異文化との出会い：西洋音楽発祥から『サカラメント提要』まで」と題し、基調講演をいただきます。次に作曲家で熊本大学教授の国枝春恵氏、平戸市生月島博物館・島の館学芸員の中園成生氏に加わっていただき、竹井氏の司会によるシンポジウム「新たな異文化との出会い：400 年の時を経て再び新たな出会いへと」を開催します。450 年前に我が国ではじめて西洋音楽が日本人



人によって演奏された地が豊後府内、現在の宮崎市であり、「天正遣欧使節」としてヨーロッパで西洋音楽を聴き、演奏もしたとされる伊東マンショは、日向国都於郡、現在の宮崎県西都市の生まれです。また九州には、キリスト教禁止後も、ひそかに「オラショ・歌オラショ」を唱え、守り続けていたいわゆる「かくれキリシタン」の地もあります。さらに「オラショ・歌オラショ」は、現代作曲家のインスピレーションを刺激する、新たな創造の源泉ともなっています。3 名のそれぞれのお立場から話題提供をいただきながら、私たちにとって西洋音楽を学

ぶとはどういうことか、異文化理解とは何かについて皆様とともに考えていきたいと思ひます。

会場となるシーガイアコンベンションセンターからは、眼下に太平洋が一望できます。広大な自然の中で、遙かな時の流れに思いをはせながら、音楽と人間とのかかわりについて共に語り合える機会となることを願っています。多数の皆様のご参加を心よりお待ち申し上げます。



#### 記

1. 会場 宮崎市シーガイアコンベンションセンター  
〒880-8545 宮崎県宮崎市山崎町浜山  
電話 0985-21-1155

2. 開催日 2015 年 10 月 3 日(土)～10 月 4 日(日)

#### 3. スケジュール案

10 月 3 日(土)

9:00	13:30	15:15	15:45	16:30	17:30	18:30	20:00
受付 研究発表 I	共同企画 プロジェクト研究	招待講演	基調講演	シンポジウム	総会	懇親会	

10 月 4 日(日)

9:00	13:30	15:15	16:45
受付 研究発表 II	共同企画 プロジェクト研究	共同企画 プロジェクト研究	
11:30～13:30 院生フォーラム			

#### 4. 実行委員会企画プログラム

大会主題「新たな異文化との出会い——16世紀から21世紀へと——」

基調講演「新たな異文化との出会い——西洋音楽発祥から『サカラメンタ提要』まで——」  
竹井 成美（宮崎大学名誉教授）

シンポジウム「新たな異文化との出会い——400年の時を経て再び新たな出会いへと——」

シンポジスト：国枝 春恵（作曲家 熊本大学教育学部教授）  
中園 成生（平戸市生月島博物館・島の館 学芸員）  
司会進行：竹井 成美（宮崎大学名誉教授）

#### 5. 参加費

会員		4,000円（事前振込）・4,500円（当日払い）
学生会員		2,000円（事前振込・当日払い）
臨時会員	一日参加	3,000円（当日受付にお申し出ください）
	両日参加	5,000円（当日受付にお申し出ください）
懇親会費（10月3日）		6,000円

#### 6. 会場へのアクセス等

下記大会ホームページをご覧ください。

<http://www.cc.miyazaki-u.ac.jp/e05107u/JMES/index.html>

#### 1-1-2 修士課程・博士課程の院生による「院生フォーラム」発表者募集要項

野村 奈央（熊本大学大学院）

村田 陽子（熊本大学大学院）

日本音楽教育学会第46回大会（宮崎大会）において、全国の大学院生によるポスターセッションを、下記の通り開催いたします。「院生フォーラム」は大学院生が企画・実施するものです。今年度は、熊本大学の大学院生2名が中心となって運営いたします。ポスターセッションにもとづく活発な意見交換を通して、院生同士の交流の場となることを願っております。多数の大学院生の参加をお待ち申し上げます。

1. 期日 10月4日（日）11:30～13:30
2. 会場 宮崎市シーガイアコンベンションセンター4階ホワイエ
3. 発表資格 申込時点で学会入会手続きを完了、会費を納入した大学院修士課程あるいは博士前期課程・後期課程に在籍する学生（入会については学会事務局にお問い合わせ下さい）。
4. 発表形式 ポスター展示、テーマ・研究計画・概要等の質疑応答
5. 申込方法 下記メールアドレスに必要事項を記入の上送信。  
jmes\_miyazaki@gmail.com  
詳細については、大会ホームページをご覧ください。
6. 申込締め切り 9月4日（金）

参加者には、院生フォーラム設営等のお手伝いをお願いする場合がございますので、ご承知おき下さい。

## 第13回音楽教育（白金）ゼミナール ◆実践研究をどう論文にまとめるか◆

平成27年8月29日（土）・30日（日）  
明治学院大学白金校舎アートホール

参加費（会員・非会員）

一般3,000円／大学院生2,500円／学部学生2,000円

**申込締切：平成27年8月10日**

ゼミナールのホームページが立ち上がりました！！

詳細及びお申込みは、下記のゼミナールホームページへ

<https://sites.google.com/site/ongakukyoikusemi13/>

日本音楽教育学会のホームページからもアクセスできます。

第13回音楽教育（白金）ゼミナールでは、

- ① 他教科・他分野の研究者から実践研究の方法を学びましょう。
- ② 新たなアプローチにチャレンジし、音楽科授業研究の可能性を探りましょう。
- ③ グループワークやラウンドテーブル等を通してさまざまな意見や情報を交換しましょう。

ふるってご参加ください！！

【講師】 木下ひさし（聖心女子大学文学部教授，国語科教育）

鈴木 聡（東京学芸大学教育学部准教授，体育科教育）

渡辺 貴裕（東京学芸大学教職大学院准教授，教育方法学）

実行委員： 佐野 靖（委員長）・市川 恵・今川 恭子・江田 司・大森 由紀・  
加藤 富美子・権藤 敦子・田中 路・水戸 博道

お問合せ☎ 第13回音楽教育（白金）ゼミナール実行委員会事務局

Ongakukyoikusemi@gmail.com

## 1-3 学会の動向

日本音楽教育学会会長 小川 容子

### 会長諮問プロジェクトについて

ニューズレター第59号でお知らせした「予備調査」（小学6年生319名を対象とした質問紙調査）の結果がまとまりました。非常に多くの子ども達が、音楽のことを「自分の心を豊かにするのに役立つ教科だ」「生活を明るく楽しく過ごすために役立つ教科だ」と感じていることが数字として示されました。また、子ども達の積極性と音楽への興味・関心との間に強い相関があるなど、大変興味深い傾向も見られました。そこで、この結果を踏まえ、2,000名の児童を対象とした本調査に取り掛かることが決定いたしました。会員の皆様にもさまざまなご協力をいただくことになると思いますので、どうぞよろしく願いいたします。本調査結果については、今年の宮崎大会で詳しくお伝えいたします。

また、6月13日には座談会【教科「音楽」の存在意義を考える】を、11月29日には「芸術教育協同シンポジウム——教育現場の芸術力を語る——」と題してシンポジウムを開催いたします。教科音楽がこれまで積み上げてきた成果を広く社会に向けて発信すると共に、教育現場の諸課題を含め、今後求められる教師像や音楽の有り様について、多角的に意見交換をおこなう予定です。皆様のご来場並びにご参加をお待ちしております。ニューズレターやホームページ等でも最新情報を発信しておりますので、ご覧になって下さい。

## 2 委員会からのお知らせ

### 2-1 選挙管理委員会

選挙管理委員会委員長 志民 一成

6月14日付で、第22期会長選挙・理事選挙関連書類（投票用紙を含む）を会員の皆様に発送いたしました。投票の締切は6月29日（当日消印有効）、開票は7月5日（予定）です。選挙について、ご不明な点がありましたら、選挙管理委員会（事務局内 E-mail: onkyoiku@remus.dti.ne.jp）までお問い合わせください。

### 2-2 編集委員会

編集委員会委員長 永岡 都

平成27年度最初の刊行となりました『音楽教育学』第45巻第1号の特集「音楽科へのエール」では、音楽教育の枠を超えた幅広い専門分野の先生方にご協力いただき、音楽教育への熱い応援メッセージをいただきました。教育哲学や美術教育から音楽学、生物心理学にいたるまで、これほど多彩な分野からご寄稿いただいたことは、おそらく初めての試みであると思います。厳しくも暖かい、貴重なメッセージを真摯に受け止めつつ、音楽教育の未来を考えるミッションが次のステージ＝我々学会員による熱い議論へと発展することを願っております。

また、『音楽教育実践ジャーナル』vol. 13 no. 2（通巻第26号）の特集「学習者の視点から学校音楽教育を考える」に合わせて実施しましたアンケート調査（6月末日締切）にも、多数ご協力いただきましてまことにありがとうございました。これから集計に入りますが、「学習者」である児童・生徒の皆さんからどのような意見が出てくるのか、これも興味深く見守りたいと思います。

なお、通巻第26号への特集投稿・自由投稿の締切は、2015年8月15日となっております。『音楽教育学』と併せて、会員の皆様の積極的な投稿をお待ちしております。

## 2-3 学会誌のあり方に関する検討委員会

検討委員会委員長 権藤 敦子

昨年10月に小川会長から「学会誌のあり方について」の諮問を受け、本委員会では、学会誌のこれまでの経緯・現状・課題を調査し、みなさまにもご意見をいただきながら、将来的な展望をもって検討を重ねてきました。検討に際し、掲載率・掲載数が低い現状を改善し、会員の立場に立ち、研究と実践のそれぞれにとってより有意義な学会誌になるよう、根拠にもとづく議論を心がけたつもりです。学会誌のあり方を変えていくためには、編集体制やシステムの変革、学会事業の新たな企画立案など、編集委員会を支えながら学会全体で取り組み、会員一人ひとりの参加しやすい環境を整えていくことが求められます。少しでも早く改善の方向性が見いだせるよう、当初の予定を早め、5月7日付で「学会誌のあり方に関する問題点の整理と改善に向けた提案(答申)」を取りまとめて会長あて報告いたしましたので、提案項目についてお知らせいたします。

1. 発行回数を『音楽教育学』年2回、『音楽教育実践ジャーナル』年1回とする。
2. 『音楽教育学』を会員の投稿を中心とした研究交流誌とし、リニューアルする。
3. 『音楽教育実践ジャーナル』を実践交流誌とし、査読は行わない。特集は1号1本ないし2本で構成し、自由投稿の枠を拡げ、原稿の種類・形態・分量を多様化する。
4. 大会口頭発表、常任理事会企画、ゼミナール等と学会誌の連携を図る。
5. 査読と編集のあり方の改善を図る。
6. 専門委員としての編集委員の顔が会員に見えるようにし、投稿原稿への対応や編集作業における信頼関係の構築に努める。
7. 採択審議および原稿掲載に向けての編集委員の任務を明確化する。
8. 編集委員を1名増員し、編集業務の円滑化を図る。
9. 編集委員長の権限と役割を見直し、編集業務における統括機能を強化すると同時に、投稿はできないものとする。
10. 理事会との連携を図り、編集委員長は理事会が必要とした場合には理事会または常任理事会に陪席し、報告を行う。
11. 「学会誌電子化プロジェクト」等として相応の予算をとり、学会誌の電子化を推進する。

提案のなかには、たとえば、音楽教育研究における実践の位置づけを見直し、多様な専門性の交流によって新たな視点や発想を見出すような誌面構成を『音楽教育実践ジャーナル』に求めるなど、学会誌の機能の捉え直しにつながるものもあります。また、大会における口頭発表と学会誌をつなぐ投稿推薦システムや、ゼミナール等での研究方法や論文執筆についてのフォーラムとの連携、投稿環境の整備についての提案も含まれています。あわせて、査読に協力していただいた方のお名前を謝辞とともに公表したり、編集委員の専門領域を紹介したりして、編集業務にかかわるコミュニケーションを円滑にする工夫にも触れています。さらに、投稿原稿の採択率を数値目標で設定するなどの試みや、委員長の役割、委員の任務を見直すこと等、編集委員会業務にかかわる提案もあります。これらの提案は5月17日に会長から理事会に諮られ、具体化に向けたワーキンググループに引き継がれることになりました。今後は、編集委員会と連携しながら改善方法が検討されることとなりますが、これまでの学会誌からの変更点については、HP、ニュースレター、総会での報告、学会誌等を通して、逐次みなさまにお知らせが届く予定です。変更の主旨をご理解いただき、学会誌への積極的なご参加をこれからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

(答申全文は学会HPにおいて公開予定)

### 3 音楽教育の窓

#### 3-1 〈連載〉音楽・教育・学校（4）

##### デミングに学ぶ音楽科の経営指針——競争原理から共有原理へ——

山本 文茂（東京藝術大学名誉教授）

皆様はウィリアム・エドワーズ・デミング（William Edwards Deming, 1900-1993）というアメリカ人をご存じでしょうか。昭和 25（1950）年、日本科学技術連盟の招きで来日した経営学者で、統計学を基盤とした品質管理の理論を講演し、「PDSA サイクル」によるその運用を提案して、戦後日本の経済復興に多大な影響を及ぼした人物です。少し大きな企業に勤めていた現在 60-80 代の人なら「デミング賞」（デミングが日本語版講演記録の莫大な印税をそっくり日科技連に寄付して成立したもの）を知らない人はいないでしょう。昭和 30-50 年代にかけて日本中の企業はその受賞に向けて、全社の努力を傾注したからです。

「PDSA サイクル」とは、Plan-Do-Study-Act の循環によってより良い品質管理を実現しようとする方式で、後に東京大学教授・石川馨（1915-1989）が日科技連刊『日本の品質管理 TQC とはなにか』（1981, 英語版 1985）の中で「PDCA サイクル」（Plan-Do-Check-Action）に改変・改称し、これを基盤として全日本に、そして全世界に日本的品質管理のノウハウと奥義を発信したのです。石川の英語版が出版された翌年には、日本の経営コンサルタント・今井正明（1930-）が *KAIZEN: The Key to Japan's Competitive Success* を出版し、日本企業が国際競争で成功した経営ノウハウのキー概念は「改善」であったことを世界中に知らせました。

こうした競争原理社会の中で、日本を世界の経済成長「No. 1」の地位に押し上げる原動力を提供したデミング自身は、驚いたことに、「産業・行政・教育において重要なのは競争原理ではない」と主張しているのです。日本講演の 44 年後に出版された彼の著作（1994）*The New Economics*, 2nd ed. The MIT Press. [邦訳（1996）『デミング博士の新経営システム論』NTT 出版] で展開されている教育改革論の骨子を要約すれば、幼児教育から大学教育までのすべての学校段階にはびこっている「グレード制」を根絶すること、教師の業績評価や得点に基づく学校間比較を撤廃すること、運動競技や文化的行事で慣例となっている授賞方式をなくすことなどにまとめられます（原書 pp. 145-149, 訳書 pp. 163-169）。まさにこれは「競争原理」から「共有原理」へのパラダイム転換と言えるでしょう。私はこのデミングの発想に大きな衝撃と示唆を受け、これからの音楽科の経営指針の前提条件として以下の 4 原理を構想しました。

- A 音楽教育の営みは、その目的・目標の達成に向けて共同的に機能し相互に依存し合う構成要素（子ども、教師、様々な学校関係者）の結合組織（ネットワーク）として成り立っており、ひとつの「マネジメント・システム」（管理・経営の運用組織）としてとらえることができる。
- B 音楽教育の実践を支える根本理念は、選別と差別を基盤とした「競争原理」に求めるのではなく、協力と協働を基盤とした「共有原理」に求めなくてはならない。
- C 音楽の学習指導は、学習内容にしたがって、教師の「指導」を中心とする活動と子どもたちの「学習」を中心とする活動とをバランスよく織り込んで展開するようにしたい。
- D 音楽指導の設計と改善は、計画・実行・評価・改善の 4 段階の環状経路をスパイラルに統合し積み上げていく PDCA サイクルの柔軟な適用によって効果的に成し遂げられる。

そして、これらを前提条件として「音楽科経営の 11 指針」（授業改善に向けての 4 指針、子ども理解に向けての 4 指針、授業力向上のための 3 指針）を設定してみました。これらはあくまで仮説発想の段階にすぎませんが、興味をもたれた方はどうぞ下記拙稿をご覧ください。

喜寿を迎えた本年、本学会ニューズレターのこんなにしてきなコーナーに寄稿することができてとてもうれしく思います。昨年 6 月に刊行された本学会のすばらしい『倫理ガイドブック』を絶えず参照しながら、会員の皆様がそれぞれのお立場で音楽授業の理論と実践の統一に向けて努力して下さることを陰ながら祈っています。

参考文献：「音楽教育における PDCA サイクル活用の視点と可能性（1/2）——成立経緯と実践仮説を中心に——」, 「音楽教育における PDCA サイクル活用の視点と可能性（2/2）——実践仮説の具体化を目指して——」, 『名古屋芸術大学研究紀要』第 33, 34 巻（2012, 2013）

### 3-2 今年度の学会・研究会等の開催予定

<b>日本学校音楽教育実践学会 第20回大会</b>	
開催期間	8月13日(木)・14日(金)
場 所	大阪成蹊大学
HP	<a href="http://www.jassmep.jp/">http://www.jassmep.jp/</a>
<b>ICMAC (新しい音楽教育を考える会) 夏の研究会</b>	
開催期間	8月16日(日)・17日(月)
場 所	日本女子大学(目白校舎)
HP	<a href="http://yukiko3501.sakura.ne.jp/wp/wp-login.php">http://yukiko3501.sakura.ne.jp/wp/wp-login.php</a>
<b>日本音楽学会 第66回全国大会</b>	
開催期間	11月14日(土)・15日(日)
場 所	青山学院大学青山キャンパス
HP	<a href="http://sound.jp/msjkyushu2014/">http://sound.jp/msjkyushu2014/</a>
<b>東洋音楽学会 第66回大会</b>	
開催期間	10月31日(土)・11月1日(日)
場 所	東京藝術大学
HP	<a href="http://tog.a.la9.jp/bulletin/News94.pdf">http://tog.a.la9.jp/bulletin/News94.pdf</a>
<b>日本民俗音楽学会 第29回大会</b>	
開催期間	11月21日(土)・22日(日)
場 所	相模女子大学
HP	<a href="http://s-jfm.org/">http://s-jfm.org/</a>
<b>日本教育方法学会 第51回大会</b>	
開催期間	10月10日(土)・11日(日)
場 所	岩手大学教育学部
HP	<a href="http://www.nasem.jp/51st-meeting/">http://www.nasem.jp/51st-meeting/</a>
<b>The Asia-Pacific Symposium for Music Education Research</b>	
開催期間	7月10日～13日
場 所	香港(香港教育学院)
HP	<a href="http://www.ied.edu.hk/apsmer/">http://www.ied.edu.hk/apsmer/</a>
<b>2nd International Conference of Dalcroze Studies "The movement connection"</b>	
開催期間	7月26日～7月29日
場 所	ウィーン(University of Music and Performing Arts)
HP	<a href="https://www.mdw.ac.at/icds/">https://www.mdw.ac.at/icds/</a>
<b>6th Annual Meeting of Advancing Interdisciplinary Research in Singing</b>	
開催期間	7月30日～8月1日
場 所	ナッシュビル
HP	<a href="http://www.airspace.ca/">http://www.airspace.ca/</a>
<b>The 2015 Biennial Meeting of The Society for Music Perception &amp; Cognition</b>	
開催期間	8月1日～8月5日
場 所	ナッシュビル(Vanderbilt University)
HP	<a href="http://vkc.mc.vanderbilt.edu/smpc2015/special-events/">http://vkc.mc.vanderbilt.edu/smpc2015/special-events/</a>
<b>22nd International Kodály Symposium</b>	
開催期間	8月3日～8月7日
場 所	エジンバラ(Merchiston Castle School)
HP	<a href="http://www.iks.hu/index.php/home1/symposium">http://www.iks.hu/index.php/home1/symposium</a>
<b>International Symposium on Performance Science</b>	
開催期間	9月2日～9月5日
場 所	龍谷大学
HP	<a href="http://www.performancescience.org/">http://www.performancescience.org/</a>



### 3-3 平成 27 年度 全日本音楽教育研究会全国大会 静岡大会のご案内

静岡大会実行委員 北山 敦康・志民 一成

全日本音楽教育研究会の総合大会となる今年度の全国大会は、静岡市で開催されます。「ひろがれ音楽つながる心」を大会テーマとした今大会の特徴は、総合大会として小学校から大学まで一体となった大会を目指していることだと言えます。1日目の会場は静岡駅から程近い、駿府城の周辺にコンパクトにまとめられていますが、場所だけでなく研究授業への取り組みやワークショップの開催についても、異なった校種をこえて「つながる」ことを意識して開催準備を進めています。

大学部会は《理論と実践の往還》を求めて、部会テーマを「つながれ音楽ひろがる心」としました。広がった音楽の輪が人々の心をつなぎ、つながった音楽の輪が豊かな心となって世界に広がる。小学校・中学校・高等学校そして大学と、学校種の枠を越えて音楽でつながる静岡の教育を日本全国へ発信し、《理論と実践の往還》によって全ての人々に「音楽する心」が広がる音楽教育研究の構築を目指しています。大会テーマの文言倒置は、その《往還》を象徴しているのです。

静岡大会の翌日からは、同じ静岡市内で大道芸ワールドカップも開催されます。多くの方のご参加を心よりお待ちしております。

日時：2015年10月29日（木）、30日（金）

場所：静岡市民文化会館（葵区）、清水マリナート（清水区）、他

静岡大会ホームページ：<http://music.shizuoka.ednet.jp>

### 3-4 ISME 情報

国際交流委員会委員長 水戸 博道

第32回 ISME（国際音楽教育会議）世界大会は、2016年7月24日から29日、スコットランド、グラスゴーにて開催されます。また、その前週には、近隣の都市において、ISME Commission Seminar も開催されます。少々気の早いご案内になりますが、ISME の発表の申し込みは大会前年の秋となり、発表申込みの時に abstract もしくは full paper の提出が求められます。ISME はヨーロッパ開催時には発表件数が増え、発表の査読も厳しくなります。参加を検討し始めるのには、ちょうど良い時期ではないでしょうか。

グラスゴーでの世界大会では、シンポジウム、ワークショップ、口頭発表、ポスター発表の4つの形式の発表が募集されています。また、その前週におこなわれる Commission Seminar は、音楽教育における特化した分野ごとに、以下に示した7つの commission に分かれて開催されます。（Research Commission, Community Music Activity Commission (CMA), Early Childhood Music Education Commission (ECME), Education of the Professional Musician Commission (CEPROM), Commission on Policy: Culture, Education and Media, Music in Schools and Teacher Education Commission (MISTEC), Music in Special Education, Music Therapy and Music Medicine Commission)

まだ、発表申込み等の詳細はホームページにアップされておりませんが、例年、発表締め切りは前年の10月から11月となっております（世界大会と Commission Seminar が異なる場合が多い）。また、申し込みの条件は、世界大会や Commission Seminar によって異なりますが、Commission Seminar では、3,000 word 程度の full paper を求めているところもあります。

世界大会では、Featured Speakers & Artists の一人として、2012年のロンドンオリンピック開会式でも活躍したパーカッション奏者の Evelyn Glennie が招待されるようです。ふるってご参加いただければと思います。

## 4 会員の声

### 4-1 子ども達の一番近くにいる研究者でありたい

水野 伸子（同朋大学）

ラップの芯にカレンダーを巻き上下にスライドさせながら吹いた奇妙な音に、3歳児は身体をよじりながらいつまでも笑っていた。4歳児は「象のおならの音だよ」「ロケットの発射の音だよ」とイメージショントっぷりロ々に言い始め、続いて吹いた《ミッキーマウスマーチ》に、5歳児は私の口元を食い入るように見つめた。また、ピアソラの《リベルタンゴ》をピアノで弾いた時、3歳児は左手の繰り返されるリズムに誘われ腕を伸ばして踊り始め、4歳児・5歳児は身動きせず神妙な顔をして、憂いのあるメロディを受け止めているかのようだった。これらは、保育園や幼稚園で開くピアノと手作り楽器による子ども参加型音楽会「音で遊ぼう・わいわいコンサート」の一幕である。第1回目からもう20年が経ち、300回を数えた。



写真1 紙筒を利用した楽器で演奏する筆者と学生

そこで見せる子ども達の音や音楽に対する反応はとて多彩であり、階段を駆け上がるかのような勢いでアンテナを伸ばしていくさまに、私は次第に釘付けになっていった。

幼児が感じる「楽しさ」の正体とは、一体何だろう・・・疑問が次々に湧き上がり、発達論を「心が揺れ動くこと」と絡めて論じていく河崎道夫氏や、ごっこ遊びの楽しさを「気分が変わる」と表現した加用文男氏の書物を新鮮な驚きとともに読んだ。そして、幼児が遊びの中で感じる楽しさに、自分自身の音楽の楽しさを重ねていった。

このような経験が、私を子どもの音楽的な発達研究に向かわせ、これまで、リズム感・調性感・和声



写真2 パルス発生用手袋スイッチ

感の観点から様々な実験を行い、幼児の音楽世界を僅かずつ紐解いてきた。

最近では、幼児の結果と成人のそれとの違いを調べるために、対象を児童に広げ、音楽鑑賞時の手拍子から音楽的な拍感獲得の過程の究明に取り組んでいる。電気工学の研究者から手拍子情報を直接パソコンに取り込む装置の開発協力をいただき、科学的に実証する手がかりを得て、研究の内容はいつそう膨らみをもった。

しかし、この実験も、3歳児が「わいわいコンサート」の中で、モーツァルト作曲《きらきら星変奏曲》を自然発生した手拍子で合わせながら、最後まで楽しんで聴いてくれたことがきっかけとなった。

私どもの研究は、「わいわいコンサート」を楽しんでくれる多くの子ども達に支えられて発展してきた。今後も、子ども達の一番近くにいる研究者として、子ども達のために、微力ながら力を尽くしていきたい。



写真3 ピアノと新聞紙による音のコラボ

## 4-2 研究構想を練る——中国地区4大学合同ゼミに参加して——

小林 佳子（兵庫教育大学大学院／岡山大学所属）  
高橋 潤子（兵庫教育大学大学院／岡山大学所属）

4月5日（日）、岡山大学教育学部音楽棟において、中国地区合同ゼミ（参加大学：鳥取大学、広島大学、山口大学、岡山大学）が開催され、学部3年生から博士課程の学生が参加しました（参加者28名うち発表者14名、教員5名）。各大学の枠をこえて、学生達が一堂に会して行う合同ゼミは、中国地区の大学合同ゼミという初めての試みで、発表当日は、普段のゼミとは一風違う雰囲気緊張感がありました。

今回の合同ゼミの発表内容は「研究テーマについて」で、発表者自身のこれまでの研究成果や新しく考えているテーマなどについて発表しました。発表されたタイトルは、「ライフヒストリーからみる生涯音楽学習の研究」「音楽科教育におけるピアノ伴奏に関する研究」「小学校におけるマンドリンを用いての実践的研究」など、いずれも興味深いものであり、中には異なる研究テーマを、2つ、あるいは3つと並行して発表する学生もいました。発表者が次の発表者を指名し、参加者全員が発言する形で、合同ゼミは進行しました。

筆者1（小林）は、修士論文で扱った「ピアノ演奏における楽譜と鍵盤間の視線移動」をとりあげ、博士課程では、より詳細な視線移動を実験で明らかにし、ピアノ演奏時の楽譜処理体系を構築するつもりであると発表しました。このことに対し、被験者の練習時間の差が演奏結果に影響するので、読譜時間を一定にした初見視奏の実験が良いなどのご意見をいただきました。また、不規則な視線移動が演奏のエラーそのものを引き起こしているのではないかと指摘をいただき、この観点を含んだ実験ができないか、現在、試行錯誤を繰り返しております。

一方、筆者2（高橋）は、修士論文において明らかになった学生の持つ音楽の感性について研究を深めるため、博士課程では、学生が無意識に視聴している映像や音楽、特にCM（コマーシャル）に関する研究に着手したいと発表しました。映像と音楽の関わりを評価する際、和声進行に関する感性がどのような影響を与えているのかを明らかにしたいと考えたからです。発表では、世代間におけるCM（映像＋音）への印象の違いや、CM音楽として用いられている既成曲の切り取られ方等をもとに私見を発表したところ、まずはCMの認知度を予備調査すること、CMと人とがどれだけ関わっているかという視点を持つべきなどのご指導、ご意見をいただきました。

今回の合同ゼミでは、お互いの研究テーマを発表しあうことで、様々な研究内容を知ることができました。合同ゼミを機会に研究仲間の輪を広げ、自身の研究をさらに深めていきたいと思っております。今後の研究に対する視点の幅が広がり、新しい方向性を学ぶことのできたゼミでした。



### ～ 広報委員会からのお知らせ ～

新刊・近刊図書の紹介やイベント、研究会等の情報・報告など、皆様からの投稿をお待ちしております。投稿先アドレスは下記の通りです。

[onkyouiku.kouhou@gmail.com](mailto:onkyouiku.kouhou@gmail.com)

## 5 新刊紹介

### 5-1 『長唄の世界へようこそ 読んで味わう、長唄入門』

山田 美由紀（長唄三味線奏者／千葉大学）

本書の著者は中学高校の国語の元教員で、日本近世文学を専攻する研究者であり、長唄の三味線を習っている。長唄の難解な歌詞がよくわかるように、《勸進帳》《越後獅子》などポピュラーな16曲を親しみやすい現代語に訳したのが本書である。

音楽教育に携わる方々に本書を紹介したかったのは、丁寧な現代語訳はもちろんのこと、本書の最初の「長唄の扉」と最後の「長唄を聴きに行こう」の内容が長唄のガイドとして優れ、この二つの部分を読むと長唄への理解が深まる、と筆者が感じたからであった。

「長唄の扉」では、長唄とはどんなものなのか、長唄という音楽や演奏の形式、歴史、そして長唄の歌詞を構成する要素について解説している。

「長唄を聴きに行こう」では、生の長唄を実際に聴くため、楽しむための方法が挙げられている。長唄はどこで聴けるか、三味線の種類、チントンシャンの意味、そして描く三味線（情景を描く合方の世界）、まねる三味線（三味線での擬音・効果音）の各項目について解説している。

これらは、国語の先生で三味線の弾き手でもある著者の持ち味が生かされ、とても簡潔でわかりやすい説明である。長唄の指導を考える上でも示唆に富んだ内容である。しかもコンパクトな分量ですぐに読める。現場の先生方が授業で長唄を扱う際に、一読を勧めたい。

また、本書のメインは歌詞の読解である。中学校の教科書にも掲載されている《勸進帳》の、たとえば「これやこの 往くもかへるも別れては 知るも知らぬも逢坂の 山かくす 霞ぞ春はゆかしける」の部分は、「行く人も帰る人も、知っている人も見知らぬ人も、すべての人が出会っては別れるという逢坂の関。そんな風に昔の人も歌に詠んだ逢坂山をぼんやりと隠す春霞、なんとも心がひきつけられるものだ。」となる。本文を読んでから唄に接すると、曲の雰囲気が変わり、なじみやすくなるのではないだろうか。このような現代語訳と曲目解説、歌詞、語句解釈、そして関連事項の解説が16曲分掲載されている。

本書は、長唄三味線演奏家で著者の三味線の師匠、松永鉄九郎氏のホームページに「長唄メモ」として2011年より掲載した解説をベースにして、松永氏の監修のもと執筆された。平成25年度十文字学園女子大学・同短期大学部学術図書出版助成の交付を受けて刊行され、日本図書館協会選定図書になっている。



#### 【目次】

はじめに

長唄の扉

曲目解説

宵は待ち・黒髪 松の緑 岸の柳 七福神

梅の栄 菖蒲浴衣 越後獅子 吾妻八景 多摩川 外記猿

喜三の庭 鷺娘 靱猿 吉原雀 勸進帳

長唄を聴きに行こう

あとがき

細谷朋子著 春風社

2014年3月28日発行、全344頁、本体3,400円＋税

ISBN 978-4-86110-400-8

## 5-2 『戦時下の子ども・音楽・学校——国民学校の音楽教育——』

本多 佐保美（千葉大学）

本書は、昭和初期のなかでも特に国民学校期（昭和 16～22 年）の音楽教育の歴史について、1980 年代中頃以降の教育史研究の動向をふまえて再検討し、近年の教育史研究が提示してきている視点と題材を用いて、音楽教育の歴史の読み直しを図ることを目的としています。具体的には、従来の文献資料に基づく制度的な視点に加えて、当時の子どもたち及び教師へのアンケート調査やインタビュー調査を行い、文書資料とナラティブなデータを照合する作業を通して、教育制度と実態との乖離や、学校音楽が子どもたちにどのような意味をもって学ばれ、どのように受容されたのか等について明らかにし、国民学校期の音楽教育を総合的に捉えることを目指しました。

国民学校期の音楽教育を読み直す作業に向けて、次の二つの視角を設定しました。

視角 1：対象の素材の固有性に注目する。国民学校期の学校教育にも、音楽教育固有の論理がまったくなかったとはいえないのではないかと。そこで、いったん従来の音楽教育史研究が前提にしていた研究枠組みを留保して、当該時期の音楽教育を描き直してみる。具体的には、個々の教育現場における教師の意識や子どもたちへの働きかけがどのように行われていたのかということに注目する。

視角 2：人々の日常生活の次元における音楽教育の意味を明らかにする。人々が、国家の示したイデオロギーを必ずしもそのまま内面化したとはいえないのではないかと。少なくとも、そのことじたいは実証されていない。そこで、人々の立場にたって国民学校期の音楽教育を描き直してみる。具体的には、子どもたちがどのように音楽教育に関わり、どのように受けとめてきたのかということに注目する。



本書の構成は、序（本研究の視角／研究の方法／調査地・調査対象校概要／国民学校芸能科音楽の概要）、第 1 章 設備・楽器・備品（音楽室の光景／「モノ」と教育費から見る芸能科音楽の成立過程）、第 2 章 歌唱（高遠国民学校と誠之国民学校の歌唱指導／子どもたちが歌った歌—社会の中の子ども、子どもの中の社会—）、第 3 章 器楽（東京と長野における器楽活動の様相／国民学校におけるブラスバンド及び喇叭鼓隊の活動）、第 4 章 鑑賞（国民学校芸能科音楽における鑑賞／音楽室の設備・備品からみた鑑賞／昭和 10 年代の小学校におけるレコード使用の諸相／高遠国民学校と誠之国民学校における聴音練習）、第 5 章 行事・儀式（国民学校の運動会における音・音楽／国民学校の音楽会／記憶からたどる儀式の中の音楽とその社会的機能）、総括 巻末資料 付属 CD 収載曲解説 あとがき、となっています。

本書は、従来の音楽教育史研究の成果に、私たちの調査によるデータにもとづく研究の新たな視角を加えることで、制度・教師・子ども・音楽といった諸要因によって存立する国民学校芸能科音楽の実相を、よりダイナミックに描き出すことを試みたものです。音楽教育の過去を検証する本研究が、現在の、また未来の子どもたちを育てる音楽教育の発展に少しでも寄与し、またその一助となれば幸いです。

本多佐保美・西島央・藤井康之・今川恭子編著 開成出版  
国府華子・村上康子・長井（大沼）覚子・山中和佳子・勝谷（杉橋）祥子著  
越山（村井）沙千子編集協力  
2015 年 2 月 28 日発行、全 408 頁、CD 付き、本体 4,000 円＋税  
ISBN 978-4-87603-492-5

### 5-3 『哲学音楽論：音楽教育とサウンドスケープ』

高橋 憲人（弘前大学大学院）

混沌とした音事象の中に生れ落ちたヒトは、二つの仕方ですれに立ち向かった。一つは、対象を名指しそれに意味を与えることばの使用、もう一つは、音事象をそのまま身体で写し取る音楽だ。双子のように誕生したことばと音楽だったが、西洋の伝統では人々はことばに重きをおくようになった。

本書は、哲学(・・・)音楽(・・・)論という聞き慣れないタイトルとなっている。西洋の伝統に沿って音楽をことばで分析し、説明し、価値づける作業が所謂「音楽哲学」だろう。それに対し、「哲学音楽」は「ことばと音楽の転倒をことばによって思考する」(本書, p. 5)。そのための4つのキーワードが、本書の表紙に鏤められている。それらを繋ぎ合わせると、「音楽的 (musically) に思考し (think), 哲学的 (philosophically) に感じる (feel)」となる。それでは、実際にどうすればよいのか？

弘前大学の著者のゼミでは、学生たちがサウンド・エデュケーションを基盤に、多くの音楽づくりを実践している。本書にも、彼らの実践が写真とともに多く紹介されている。そこでは、学生たちの身体を媒介に、環境音から音楽が生まれたり、既存の音楽から新たな舞踊が生まれたりする。聴くことと音を創ることの循環の中に生まれるその瞬間を、出来るだけ意味づけを避けながら、ことばで透明に写し取る。哲学音楽論はそのような試みとなっている。なぜなら、ことばの双子として誕生した頃の、音楽の原初の姿を通時的にシミュレートしても、それは音楽哲学でしかない。身体で世界の音を聴き、身体で世界に音を投げ返す。その連続の中に音楽の原初が顕れる瞬間を、共時的に体験し思考することでしか哲学音楽はなしえない。本書はそのような哲学音楽の実践であり、これから生まれる新たな哲学音楽のサプリメントとなるだろう。

詳しくは出版社ホームページまで。



今田匡彦著

恒星社厚生閣, 全 176 頁

2,700 円+税, 2015 年 4 月 1 日刊行

ISBN-13: 978-4769914938

## 6 報告

### 6-1 平成 27 年度 第 1 回常任理事会報告会

日 時：平成 27 年 5 月 17 日（日）14:00～15:00

場 所：立教大学（池袋キャンパス 12 号館第 4 会議室）

出席者：小川，伊野，本多，加藤，北山（記録），権藤，佐野，嶋田，中地，水戸  
小川会長の挨拶に続き，本多事務局長より以下のように会務報告があった。

#### 【会務報告】〈平成 27 年 2 月 22 日以降〉

2 月 22 日	平成 26 年度第 4 回常任理事会 第 2 回学会誌のあり方に関する検討委員会 第 2 回会長諮問プロジェクト会議（立教大学）
3 月 18 日	宮崎大学表敬訪問
3 月 27 日	ニューズレター第 59 号 発行 音楽教育実践ジャーナル vol.12 no. 2 発行
3 月 31 日	平成 26 年度会計決算
4 月 19 日	平成 26 年度会計監査会（事務局）
4 月 26 日	平成 27 年度第 1 回編集委員会（立教大学）
5 月 17 日	平成 27 年度第 1 回常任理事会・理事会（立教大学）

#### 【審議事項】

#### 1. 平成 26 年度決算報告及び監査報告（佐野）

資料に基づき平成 26 年度の決算報告があり，監査報告は理事会で行う旨の報告があった。

#### 2. 平成 27 年度事業計画及び補正予算について（本多・佐野）

平成 27 年度の事業計画に基づいて補正予算が提示され，以下の点について説明があった。

- ・郵送費及び消費税の値上がり・郵送料の増加により，通信・郵送費を 20 万円上乘せした。
- ・来たる創立 50 周年事業に備えて学会基金を 10 万円上乘せした。
- ・ワークショップの残金を簿外より繰り入れした。（ゼミナールとワークショップを一括）。
- ・韓国からの招待講演の補助として国際交流基金に 20 万円を計上した。

#### 3. 平成 28 年度事業計画及び予算案について（本多・佐野）

平成 28 年度の事業計画及び予算案について説明があった。

- ・音楽教育ゼミナールまたはワークショップの実施については未定である。
- ・学会誌の発行については，今後の学会誌のあり方検討委員会の答申によって変更もありうる  
が，とりあえず例年通りということで記載してある。
- ・28 年度の予算案については，例年及び 27 年度の補正予算案に基づいて組んだ。

#### 4. 第 46 回大会について（報告も含む）▶ 2，3 頁参照

##### (1) プロジェクト研究Ⅰについて（嶋田）

配布資料に基づき趣旨説明が行われた。昨年度の成果を踏まえ，本年度は小学校に勤務する本学会員（約 150 名）を対象にした共通教材に関するアンケートの実施（7 月予定），開催地の現職教員の登壇，2 年間の成果をふまえたコメント（村尾忠廣会員）を予定している。なお，これに関わる予算は約 10 万円の見込み。

##### (2) プロジェクト研究Ⅱについて（加藤）

- ・配布資料に基づき趣旨説明が行われ，「会長諮問プロジェクト」を常任理事企画の「プロジェ

クト研究Ⅱ（学会から社会への発信）」の第1年次として計画することが報告された。具体的には、「教科音楽によって培われる力とは」をテーマにして、6月の座談会と7月までに行われる本調査の結果を会員に広く伝えたい。6月に行われる座談会【教科「音楽」の存在意義を考える】の報告、「子どもたちへのアンケート」の調査報告を含める。

- ・パネルディスカッション「これからの学校教育と教科音楽で培う力」では、伊野理事の司会で、津田正之会員（文部科学省教科調査官）、小川会長、佐野理事の3名による鼎談の形を考えているが、詳細については未定である。

### (3) その他

韓国音楽教育学会（KMES）ヒュン（Hyun, Kyungsil）会長の来日及び同学会員による宮崎大会における研究発表の可能性について以下のように確認された。まず、参加費と発表者の受け入れ数等について整理して先方に伝える。その際、会員発表は会員に関する内規にもとづいて実行委員会企画という形で行う。また、同規約により参加費は無料とする。大会実行委員会と国際交流委員会の連携のもとで、対応にあたる。

### 5. 来年度ワークショップまたはゼミナールについて（小川）

来年度に行う予定のものをワークショップにするかゼミナールにするかについては、国際交流委員会委員長に一任する旨が伝えられ、これが承認された。

### 6. 会長諮問プロジェクトについて（小川） ▶5頁参照

予備調査（300名対象）の分析結果について説明があり、本調査（2,000名対象、小学校6年生）を理事がそれぞれ100名を分担して行うことになった。締め切りを7月10日とし、質問紙等の返送先は学会事務局とすることとした。

### 7. 学会誌のあり方に関する検討委員会からの提案について ▶6頁参照

事前配布資料の説明がなされ、小川会長より本日付でWGによる活動を開始する旨が伝えられた。WGのメンバーは、権藤、有本、今川、伊野、本多、山下、中嶋の7名（理事+検討委員会メンバー）で、今後、規定改正などの全体のスケジュールを会員に向けて公表することが承認された。

### 8. 非会員の査読謝礼について（永岡→中地）

資料に基づき、1件につき5千円が妥当（年間4～5万円見込。昨年度は8名の非会員に依頼）との編集委員会の案が承認された。支払いの方法については別に考えることとなった。

※理事会と重複する審議・報告は理事会にて行われた。

## 6-2 平成27年度 第1回理事会報告

日時：日 時：平成27年5月17日（日）15：00～17：00

場所：立教大学12号館第4会議室

出席：小川、伊野、本多、小畑、加藤、北山、木村（記録）、権藤、佐野、嶋田、中地、福井、水戸、村尾、安田、松本

小川会長の挨拶に続き、本多事務局長より、以下の2015年2月22日以降の会務報告がなされた。

【会務報告】〈平成27年2月22日以降〉

2月22日 平成26年度第4回常任理事会

第2回学会誌のあり方に関する検討委員会

第2回会長諮問プロジェクト会議（立教大学）

3月18日 第46回大会開催地（宮崎大学）表敬訪問



- 3月27日 ニュースレター第59号 発行  
音楽教育実践ジャーナル vol.12 no.2 発行
- 3月31日 平成26年度会計決算
- 4月19日 平成26年度会計監査会（事務局）
- 4月26日 平成27年度第1回編集委員会（立教大学）
- 5月17日 平成27年度第1回常任理事会・理事会（立教大学）

#### 【審議事項】

1. **平成26年度決算報告及び監査報告（本多・島崎）**  
本多事務局長より、資料に基づいて会計報告がなされた。  
島崎会計監事より、4月19日学会事務局において、奥忍会計監事と島崎会計監事によって会計監査が行われ、適正な会計処理が確認されたとの報告があり、承認された。
2. **平成27年度事業計画及び補正予算について（本多・佐野）**  
平成27年度事業計画について提案があり、承認された。  
平成27年度補正予算について提案があり、承認された。
3. **平成28年度事業計画及び予算について（本多・佐野）**  
平成28年度事業計画について提案があり、承認された。  
平成28年度予算について提案があり、承認された。
4. **第46回大会について ▶2, 3頁参照**
  - (1) 大会実行委員会（菅→福井）  
第46回大会のスケジュール案、基調講演、シンポジウム、院生フォーラムなどについて説明が行われた。  
招待講演のヒュン会長および韓国からの発表者（またはオブザーバー）とのやり取り・対応について、すべての情報は国際交流委員会の水戸委員長のもとに集約し、実行委員会と連携して対応していくことが確認された。
  - (2) 企画担当理事（加藤・嶋田）  
研究発表の司会担当協力が要請された。  
常任理事会企画プロジェクト研究Ⅰについて説明がなされた。  
プロジェクト研究Ⅱ（会長諮問プロジェクトと連動）について説明がなされた。
  - (3) 大会参加費について  
会員・非会員問わず、学部学生の参加費は一律2,000円であることが確認された。
  - (4) アマリスの開始について（本多）  
アマリスオープンは5月下旬を予定しており、登録締切は6月21日であることが確認された。
5. **第47回大会（関東地区・横浜国立大学大会）について（小川）**  
順調に準備が進んでいることが確認された。
6. **ゼミナール（白金ゼミナール）について（佐野） ▶4頁参照**  
8月29日・30日に開催される第13回音楽教育（白金）ゼミナール「実践研究をどう論文にまとめるか」について説明がなされ、実行委員を、佐野靖（実行委員長）、市川恵（会計担当）、今川恭子、江田司、大森由紀、加藤富美子、権藤敦子、田中路、水戸博道会員に委嘱することが承認された。
7. **来年度ワークショップまたはゼミナールについて（水戸）**  
次回ゼミナール（第2回 英語で論文を書こう）は平成28年度8月頃の開催を予定している旨、報告された。
8. **会長諮問プロジェクトについて（本多・小川） ▶5頁参照**  
平成27年度会長諮問プロジェクト予算（案）について提案があり、承認された。

小川会長より会長諮問プロジェクト予備調査結果について説明がなされ、宮崎大会にて本調査(2,000名ほどを対象予定)結果を公表予定であるため、理事1名につき100名前後の児童(小学校6年生)への調査を依頼したい旨、提案され、承認された。(7月10日返送締切、返送先は事務局とする。回答所要時間はおよそ15分程度)

あわせて、6月13日開催【座談会 教科「音楽」の存在意義を考える】(於:学習院大学)および11月29日開催「芸術教育協同シンポジウムー教育現場の芸術力を語る」(於:学習院大学)について説明がなされた。

#### 9. 学会誌のあり方に関する検討委員会(権藤) ▶6頁参照

検討結果(答申の内容)について説明がなされた。今後の進め方について協議が行われ、小川会長より以下の通り提案され、承認された。

- (1) 本日(5月17日)付けでWGを立ち上げること
- (2) 同WGには現編集委員を含めること
- (3) WGのメンバーとして、7名(有本真紀・伊野義博・今川恭子・権藤敦子・中嶋俊夫・本多佐保美・山下薫子会員)に委嘱すること(なお、常任理事会・理事会終了後、申し出により、有本・今川・伊野・権藤・本多・三村会員の6名に変更され、理事MLで了承された)。
- (4) 本年10月の宮崎大会での提案を含めて、早急に実際の作業に取りかかること

#### 10. 『音楽教育学』投稿規定の一部改正について(本多)

『音楽教育学』投稿規定の一部改正について提案があり承認された。大会時の総会報告後に施行される予定。

- I 投稿資格(現行) 3. 新入正会員については、入会の翌年度から投稿できるものとする。  
(改正案) 3. 新入正会員については、入会と同時に投稿できるものとする。

#### 11. 非会員の査読謝礼について(永岡→中地)

非会員への査読謝礼を5,000円とすることが提案され、承認された。  
共同企画のページ数について提案がなされたが、継続審議とすることが確認された。

#### 12. 参事について(加藤)

新参事 田邊裕子氏の就任が提案され、承認された。

#### 13. 名誉会員について(小川)

名誉会員の本年度推薦の該当者なしとすることが提案され、承認された。

#### 14. 新入会員及び退会者について(本多)

新入会員及び退会者の報告がなされ、承認された。

◇正会員 新入会員(平成26年10月24日理事会以降):40名

◆正会員 申出退会 36名

【5月11日現在 正会員数1,549名 学生会員数1名 特別会員数1名】

### 【報告事項】

#### 1. 各委員会報告

##### (1) 広報委員会(権藤)

ニュースレター第60号および第61号の「音楽教育の窓」執筆者について報告された。

##### (2) 選挙管理委員会(志民→本多)

選挙日程(6月14日発送作業、6月29日投票締切、7月5日開票)が報告された。

##### (3) 音楽文献目録委員会(木間→本多)

資料に基づいて第163回音楽文献目録委員会について報告された。

##### (4) 学会賞審査委員会(小川)

本日、6名の委員にて審査を行った結果、「該当者なし」となったことが報告された。

## 2. 例会報告（各地区担当理事）

平成 26 年度後半期の地区例会および平成 27 年度前半期の地区例会（予定）について報告された。

北海道：8月 2 日（土）於：北海道教育大学旭川校

予定：8月 2 日（日）於：北海道教育大学札幌駅前サテライト

東北：2月 21 日（土）於：弘前大学

北陸：3月 1 日（土）於：金沢大学

次回は日本音響学会音楽音響研究会との合同開催を予定

関東：3月 28 日（土）於：明治学院大学／予定：6月 13 日（土）於：学習院大学

東海：3月 26 日（木）於：愛知教育大学

近畿：3月 28 日（土）於：神戸松蔭女子学院大学

予定：5月 30 日（土）於：滋賀大学

中国四国：2月 28 日（土）於：岡山大学

九州：2月 28 日（土）於：福岡教育大学

## 3. 教育関連学会連絡協議会の報告（小川）

3月 14 日開催「教育関連学会連絡協議会」について報告された。

## 4. 育志賞について（本多）

第 6 回（平成 27 年度）日本学術振興会 育志賞受賞候補者の推薦について報告された。

## 5. 名簿発行の進捗状況について（本多）

選挙日程に合わせ 5 月末までに名簿詳細を整えるべく、事務局にて作業を進めている旨報告された。

## 6. 事務局員の交代について（本多）

事務局 坂本氏の退任に伴い着任される若尾裕子氏が紹介された。

\*今後の予定

第 2 回常任理事会 7 月 20 日（月） 15 時～17 時（予定）於 立教大学

第 3 回常任理事会 10 月 2 日（金） 14 時～15 時（予定）場所未定

第 2 回理事会 10 月 2 日（金） 15 時～17 時（予定）場所未定

## 6-3 平成 27 年度第 1 回編集委員会報告

4月 26 日（日）、立教大学にて平成 27 年度の第 1 回編集委員会が開催された。会議の報告、協議事項は以下の通りである。

(1) 『音楽教育学』第 45 巻第 1 号と『音楽教育実践ジャーナル』vol.13 no. 1（通巻 25 号）の編集過程の総括と進捗状況の報告。編集作業は順調に進められている。

(2) 投稿原稿の採否について：『音楽教育実践ジャーナル』への新規投稿は論文 2 本で、審議の結果、論文 2 本ともに「再査読」となった。また、『音楽教育実践ジャーナル』vol.13 no. 1（通巻 25 号）の特集投稿は論文 3 本、報告 4 本、提案 2 本で、審議の結果、論文 1 本、報告 1 本、提案 1 本が特集の構成に合わせた修正を条件に「採択」となった。

## 6-4 学会賞審査委員会

学会賞審査委員会委員長 小川 容子

第 4 回学会賞（『音楽教育学』第 43 巻第 1 号～第 44 巻第 2 号及び『音楽教育実践ジャーナル』vol.11 no. 1～vol.12 no. 2）について慎重に審議をおこなった結果、5月 17 日開催の「学会賞審査委員会」において、該当なしという結果になった。席上、今後は、学会賞だけでなく、口頭発表を対象にした賞を考えてはどうか、若手奨励賞等も検討したいといった意見があり、別途、継続審議することとなった。

## 7 事務局より

事務局長 本多 佐保美

### 1. 第46回大会研究発表の申込みを締め切りました。

多数のお申込みを有難うございました。

### 2. メールアドレスの登録をお願いします。

年度会費納入の確認作業を事務局で行なうと、会員のお手元に確認メールが自動送信されます。メールアドレスが未登録の方、アドレス登録済みで会費納入したのに確認メールが来ないという方は、事務局にご一報くださるようお願いいたします。なお、事務局開局時間の関係や業務の多寡によって、会費納入後確認メール送信まで2週間程度要することもありますのでご了承ください。

### 3. 名簿作成について

2015年10月発行(12月発送)をめざし、名簿作成をすすめています。現在は、名簿掲載情報の確認作業を行っている段階です。会員の皆様には、名簿発行作業を円滑にすすめるため、ご協力のほどよろしくお願い致します。

### 4. バックナンバーの販売について

『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。詳しくはホームページをご覧ください。

#### ◆事務局開局時間

月・水・木 9:00～15:00 (従来の金曜日から木曜日に変更になっております)

E-mail (onkyoiku@remus.dti.ne.jp) FAX : 042-381-3562

#### ◆事務局員

亀山さやか・若尾裕子

♪3年間おつとめ頂きました坂本友里さんに代わり、若尾さんに新しいスタッフとして加わって頂きます。どうぞよろしくお願い致します。

### ..... 【編集後記】 .....

今回のニューズレターは第60号という節目を迎えました。年4回発行していますので、ちょうど15年前の2000年に誕生したことになります。そこで、ファイルに綴じてあるニューズレター第1号を久しぶりに開いてみました。東京芸術大学で開催された第30回大会の総会で「日本音楽教育学会ニューズレター」を発行することが決まったと記されています。そして、2000年3月20日にニューズレター第1号が発行されています。当時の会長は山本文茂氏(現 名誉会員)でした。なお、同氏には、本号の「音楽教育の窓」の連載にご寄稿いただいています。15年という歳月が流れ、ニューズレターも成熟期を迎える頃でしょうか。

ニューズレターへの情報提供など、会員の皆様からの投稿をお待ちしております。また、ニューズレターの更なる充実に向けてのご意見、ご要望もお寄せください。  
(齊藤 忠彦)

投稿先アドレス☞ [onkyoiku.kouhou@gmail.com](mailto:onkyoiku.kouhou@gmail.com)



【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX : 042-381-3562 E-mail : onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 \*郵便物は私書箱へ

開局日：月・水・木

開局時間：9:00～15:00